

季刊マーメイド

逗子市立図書館報
第1号
2013年8月1日発行
逗子市立図書館
逗子市逗子4-2-10
046(871)5998
(電話案内サービス)

柳屋旅館訪問記

富士見橋に近い田越川沿いに『蘆花獨歩ゆかりの地』の碑が建っています。ここは明治の文豪徳富蘆花、国木田独歩が一時期を過ごした『柳屋』がかつてあったところです。

明治22年横須賀線が開通し、逗子駅が出来たことから逗子には多くの別荘が建ち、貸別荘や貸間が増え避暑地として名が知られるようになりました。蘆花の兄、徳富蘇峰もたびたび保養のため訪れていました。故郷の熊本県水俣に似ていることから逗子を気に入っていた蘇峰は両親のために『柳屋』に部屋を借ります。このことから蘆花や独歩も『柳屋』と深い縁を持つことになったようです。逗子で貸し家業を最初に始めたのは『柳屋』だったと言われています。



蘇峰の紹介で国木田独歩が信子夫人と新婚生活をここでスタートさせたのは明治28年11月のことでした。しかし独歩の結婚生活は思うようにはいかず、わずか数か月で逗子を後にします。それから1年もたたないうちに、蘆花もこの地で愛子夫人と暮らすことになりました。蘆花の小説『富士』には『柳屋』が「あらめ屋」の名で登場し、当時の当主石渡嘉兵衛さんやご家族の日常がいきいきと描かれています。また、同宿の客から聞いた話をヒントに書いたとされる『不如帰』は逗子を一躍有名にしました。

このように、蘆花や独歩の作家人生にとって『柳屋』は大きな影響を与えた場所になったのです。

しかし、昭和29年、火災によって建物は焼失し、残念ながら姿を消してしまいました。また、二人の著書にも描かれ、古くから逗子に住んでいる方にとっては懐かしい井戸や藤棚、イチジクの木があった風景も今は見ることはできません。「碑」が当時の証として建っているだけです。『蘆花獨歩ゆかりの地』の碑は嘉兵衛さんのあとを継いだ長男喜市さんによって建てられました。

この『柳屋』の名を継いだのが『柳屋旅館』でした。既に桜山9丁目に転居していた三男秀雄さんが開業し、長い間親しまれてきました。

その『柳屋旅館』が、長い歴史に幕を下ろしたと聞いたのはあまりにも突然のことでした。『独歩、蘆花ゆかりの宿 柳屋』の名は名実ともに消えてしまうことになるのでしょうか。悩んだ末、思い切って訪ねてみることにしました。

その日は春の長雨の中のわずかに晴れた一日でした。

『柳屋旅館』へは『蘆花獨歩ゆかりの地』の碑から田越川沿いの道を河口に向かって真っすぐ進み、渚橋交差点をわたるとゆるやかな坂道を上ります。

途中、5月のさわやかな風に誘われて、急に思い立ち、寄り道をすることにしました。一旦右に曲がり、神奈川県天然記念物に指定された鑑摺の不整合を眺めながら進むと、その少し先に、『独歩の文学碑』が浄水管理センターのフェンスの中にひっそりと建っています。ここにも独歩の足跡がありました。



元の道に戻り、さらに少し下って山側に折れると、あたりは閑静な住宅地です。賑やかな逗子海岸が間近とは思えないほどの谷戸の静けさにつつまれて『柳屋旅館』は建っていました。

『海近き山荘 粋な宿 柳屋』と書かれた看板がこの地をよく表しています。また、足下の道は舗装されてはいるものの、山の湧水が流れる豊かな水音が聞こえます。ちょうど庭の手入れをされていた現在の当主石渡秀喜さんに無理な願いをすると、快く招き入れてくださいました。

玄関の趣のあるのれんの奥の和室には日本家屋独特のやわらかい陽が射し込んでいました。この部屋で宿泊者のために「蘆花愛用の机」と「籐の椅子」が展示されていたようです。

先代夫人喜久子さんはかつて「義母より愛子夫人の座机と蘆花さんの籐椅子をもらいました。机はここにもってきてあったので焼けずに残り・・・」と、幸いにも焼失をまぬがれたいきさつを語っていらっしゃいます。

また、蘇峰から当時の当主嘉兵衛さんにあてた直筆の礼状も額装され大切に保存されていました。逗子にとって貴重な文化遺産を拝見させていただきました。



蘆花愛用の籐のいす



蘆花愛用の机



蘇峰直筆のお礼状

2 階の窓からは瓦屋根越しに静かな谷戸の自然のひろがりを見ることが出来ます。頼朝の愛妾「亀の前」が匿われた大多和義久の館跡はこのあたりと伝えられており、いかにも「亀の前」がひっそりと身を潜めていた隠れ里の趣です。

現代的な家が建ち並ぶなか、別世界のように豊かな自然にかこまれた日本の宿がまだ残されていた事に驚くとともに、宿を閉じてしまわれた事を心から残念に思いながら『柳屋旅館』を後にしました。

たくさんの貴重なお話をしてくださった石渡秀喜さんに心からお礼を申し上げます。(M.S)



柳屋旅館周辺

独歩と蘆花

柳屋における独歩と蘆花を偲んで、昭和 36 年、石渡喜市さんは『柳屋の独歩・蘆花』（木村彦三郎著）という小冊子を発行されました。この貴重な研究書を参考にしながら、逗子と独歩と蘆花に焦点を当ててみたいと思います。独歩と蘆花は蘇峰を通じ、柳屋に住む以前から知り合いです。独歩と蘆花が柳屋で同時期に暮らすことはありませんでしたが、蘇峰・蘆花兄弟の両親は、独歩と信子夫妻が過ごしていた明治 29 年冬に避寒のため逗子に来て、柳屋で隣り合わせに生活していました。この時両親の案内役として逗子まで同行した蘆花は、逗子で見られる曙の富士山の美しさを独歩から説かれました。後に蘆花が逗子への移住を決断したのは、独歩とのこの会話がきっかけだったようです。独歩と蘆花が感銘を受けた富士の眺めは、蘆花の『此の頃の富士の曙』（『自然と人生』所収）に描かれています。独歩も柳屋近くで眺めた富士が忘れ難かったようで、『武蔵野』で「われわれが逗子の「あぶずり」で眺むるよう」な富士に言及しています。

独歩と信子の出会いや柳屋での結婚生活のことは、独歩の日記『欺かざるの記』で知ることができます。独歩と信子を見守っていたのが信子の従姉の星良子、後の相馬黒光です。黒光は自伝『黙移』に「国木田独歩と信子」という章を設け、柳屋時代の二人のことや信子のその後について書いています。『欺かざるの記』とは異なる視点から書かれていて興味深いものがあります。信子は、有島武郎の『或る女』の主人公のモデルとされています。独歩の短編小説『おとづれ』や『鎌倉夫人』にも信子を思わせる人物が登場します。信子は作家の創作意欲をかき立てるような人物であったと想像できます。当時の逗子を舞台にした独歩の作品には『たき火』や『第三者』があります。

蘆花は、柳屋滞在の4年間（明治30年～33年）に、作家として大いに力を発揮しました。柳屋での最初の仕事はトルストイ評伝でした。『不如帰』をはじめ、『自然と人生』、『思出の記』と柳屋で代表作を次々に発表しました。

蘆花は明治41年3月11日に、独歩宛の手紙『国木田哲夫兄に与へて僕の近状を報ずる書』を書いています。この日付は独歩の死の約3ヶ月前、病床にあった時期に当たります。蘆花は「独歩とは終生の温かい友情を維持した」と言われています。柳屋を離れてから、独歩と蘆花はそれぞれ様々な体験をしていますが、逗子の柳屋で得たものは二人にとってかけがえのないものであり、終生二人を結びつけるものだったのではないかと考えられます。(R.I)



木村彦三郎著 石渡喜市発行

〈文中で引用した図書館所蔵の主な文献〉

- 『柳屋の独歩・蘆花』 木村彦三郎著 91.Z キ
『富士—小説—』第1～3巻 徳富健次郎著 徳富愛著 福永書店 ZY F ト 1～3 他
『欺かざるの記(抄)』 国木田独歩著
『新日本古典文学大系—明治編—28』 岩波書店 N 918 シ 28 所収 他
『黙移相馬黒光自伝』 相馬黒光著 平凡社 289.1 ソ
『黙移』 相馬黒光著 『日本人の自伝 6』 平凡社 281 = 6
『国木田哲夫兄に与へて僕の近状を報ずる書』 徳富蘆花著
『現代日本文学大系 9』 筑摩書房 ZY 918.6 ト 所収 他